実践研究事業（中間報告）

令和５年３月 30 日

独立行政法人 国立青少年教育振興機構
国立諫早青少年自然の家

目　　次

１．国立青少年教育振興機構の教育事業及び実践研究事業の位置付け・・・・・・・・　1

２．国立諫早青少年自然の家の教育事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

３．国立諫早青少年自然の家における実践研究事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

【報告書】令和３年度「チョイス」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

４．令和４年度～７年度の実践研究事業の方向性　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

【報告書】令和４年度「自然の家ハイパーレスキューチームスタートアップキャンプ」　・・・・・・・　8

５．令和３、４年度の実践研究における評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13

６．おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13

１．国立青少年教育振興機構の教育事業及び実践研究事業の位置付け

国立青少年教育振興機構（以下、青少年機構）は、全国２８か所に教育施設を持ち、青少年教育のナショナルセンターとして、青少年に対し教育的な観点から体験活動等の機会や場を提供するとともに、青少年教育指導者の養成及び資質向上、青少年教育に関する調査及び研究、関係機関・団体等との連携促進等を実施し、青少年教育の振興及び健全な青少年の育成を図ることを目指している。

また、国の政策実現に向けて、国土強靭化への対応やＥＳＤ・ＳＤＧｓの推進、地域との連携・協働の推進による地域貢献等、様々な取組を行っている。

青少年機構では、青少年の課題や国の政策課題に対応しつつ、立地条件及び地域特性やニーズを踏まえた青少年及び青少年教育指導者等を対象とする事業を「教育事業」と呼び、青少年教育のモデル的事業、課題を抱える青少年を支援する体験活動事業、グローバル人材の育成を見据えた国際交流事業等を実施している。

その中の青少年教育のモデル的事業の一つとして、テーマを定め、関係機関・団体や公立青少年教育施設等、大学の研究者等と連携した上で、体験活動の効果測定等を行い、報告書にまとめ広く普及する「実践研究事業」の中間報告が本資料となる。

実践研究事業における報告書は、令和３年度から始まった第５期中期目標期間において、令和４年度及び令和６年度の２回作成することとなっている。

２．国立諫早青少年自然の家の教育事業

国立諫早青少年自然の家（以下、諫早自然の家）は、長崎県と佐賀県にまたがる多良山系の中腹に位置し、眼下には諫早平野や雲仙、遠くは熊本県天草地方を見ることができる自然環境豊かな場所に立地しており、沢登りやオリエンテーリングを始めとする自然体験活動プログラムの他、グループワークを通して協調性や他者への信頼感、自己肯定感などを育む諫早コミュニケーションプログラム（以下、I-cap）が人気の活動となっている。

その他、自然に親しむ「タラッキーキャンプ」やＥＳＤ・環境教育に対応した「木育キャンプ」、全国高校生体験活動顕彰制度に向けた「地域探究プログラム」等、様々な教育事業を実施しているが、特に力を入れている教育事業が次の３つである。

① 活動フィールドを活用した防災・減災教育プログラムの開発に資する教育事業
② スポーツ指導者等を対象としたチームビルディングの普及のための教育事業
③ 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

３．国立諫早青少年自然の家における実践研究事業

諫早自然の家では、令和３年度に開始した実践研究事業として、上記「２．③」に該当する教育事業「チョイス」を実施した。これは、不登校や引きこもり等の課題を抱える子供たちを対象に、様々な体験活動プログラムを自分自身で選択し、体験することを通して、個々の興味関心を引き出し、次の一歩を踏み出す意欲を高めることを目的とした事業である。次ページからは、その報告を掲載する。また、令和４年度からは、「２．①」に該当する防災・減災教育プログラムの開発に資する教育事業を実践研究事業とすることとした。

子

～一緒に感じよう、見つけよう 自然・自分・仲間 ～

期日：3月10日(木)

※日帰りで実施しました。

自然の中で、のんびり

コロナ禍になって、自由に外出できませんよね。自然の家なら、体を動かしたり、季節を感じたり、きつくなったら、休んだり、自分のペースで楽しめます。

子どもも大人も元気に

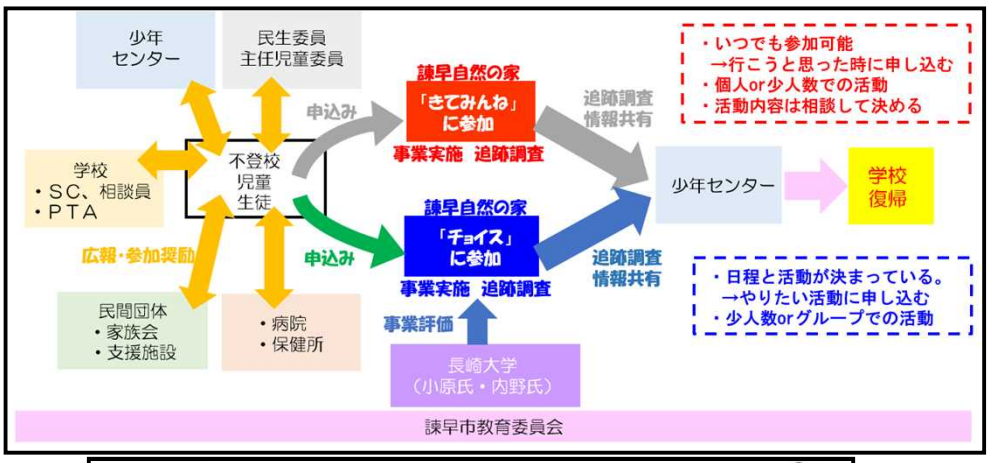
「自然の中で遊んだ後は、みんな元気なんです。」
「スマホも忘れて、夢中になってました。」
自然の家を利用した引率の先生や保護者の方からの嬉しい声です。

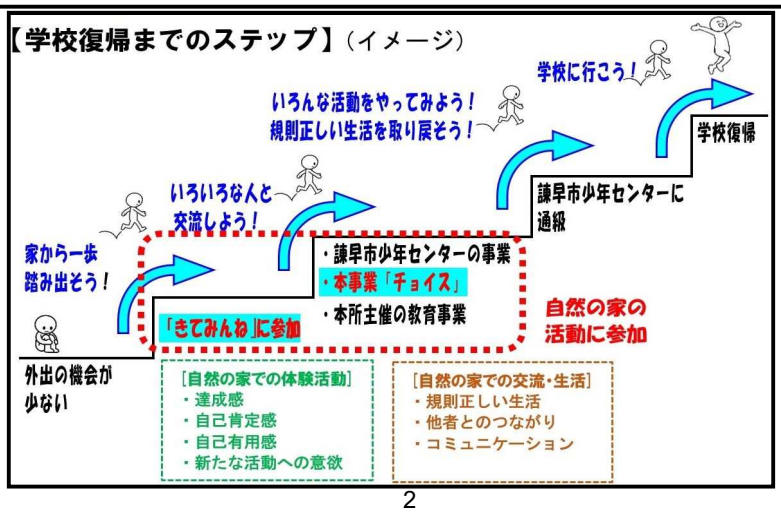
いつ？ だれと？ 何したい？ 自分のスタイルを見つけて 自然を楽しもう！

通級している子供や通級に一歩踏み出す前の子供たちの興味関心を引き出し、意欲を高めることで自らやってみたい体験を見つけることができるような支援に重点を置いた２つの事業を企画しました。

【ステップ１】「きてみんね」：いつでも、行きたい時に個人で参加できる。活動は当日、相談する。
【ステップ２】「チョイス」　：日程と活動が決まっている。少人数orグループでの活動

この事業は、諫早市少年センターと長崎大学 名誉教授 小原達朗氏、長崎大学 人文科学域（教育）教授 内野成美氏と連携して実施しました。





バス迎え　※希望者（9:30　少年センター発）
10:00　受付
10:15　出会いの会
（日程説明等）
10:30　活動開始
（選択活動）

焚き火でのんびり	昼食（持参）	焚き火でのんびり
火おこし体験		火おこし体験
ミニオリエンテーリング		ミニオリエンテーリング
葉っぱのスタンプ		葉っぱのスタンプ
室内スポーツ		室内スポーツ

14:00　ふりかえり
バス送り　※希望者（14:15自然の家発、14:45少年センター着）

計20名（児童・生徒 14名、保護者 2名、連携団体引率者 4名）

	小5	小6	中1	中2	中3	保護者	引率者	計
男	1	2	0	2	1	0	3	9
女	1	0	1	5	1	2	1	11
計	2	2	1	7	2	2	4	20

※児童生徒の活動参加者数
　ＡＭ：14人、ＰＭ：15人
※保護者2名は、子どもと同じ活動に参加した。
※少年センター職員は、児童生徒の状況に合わせて、自由に動いていただいた。

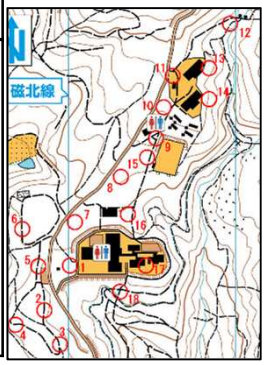
【出会いの会】全員
参加者の活動意欲が高まるよう、屋外で円になり、今日1日が「自然の遊園地」と宣言することから会を始めました。1日のねらいを参加者とスタッフ全員で共有し、日程説明後に午前の活動を選択（チョイス）しました。その後、全員で焚き火に点火（マジックファイヤー）して活動をスタートしました。
＜スタッフふりかえり＞
・昼間で火が見えてしまったが、スタッフのかけ声時に火が大きくなりタイミングも良かった。他の事業と同様の室内でのかしこまった流れではなく、今回のスタイルが適当だった。

※写真は、別の事業で実施した際のものです。

【焚き火でのんびり】ＡＭ：1人、ＰＭ：0人
出会いの会で着火した焚き火を見守りながら、のんびりと過ごす活動です。他の参加者が戻った時に焚き火が消えないよう、薪拾いや薪割りに積極的に取り組んでいました。
＜スタッフふりかえり＞
・「自由に過ごしても良いよ」と指示しても参加者は自分から行動することが難しいので、薪拾い→木を切る→火をつけるなどと作業の流れを事前にイメージしておくべきだった。
焼き芋とか、火の管理が他の参加者の支援につながるようにすることで参加者のやりがいにできる。

【火おこし体験】ＡＭ：4人、ＰＭ：2人
本所で来年度から利用者に提供予定の「まい切式火おこし器」を使った火おこし体験を行いました。火おこし体験は、種火を作るまでに時間がかかる技術と根気が必要な活動でしたが、午前中でつけることができなかったことを悔しがり、午後も同じ活動を選んだ参加者もいました。親子で交代しながら協力して摩擦棒を回し、最後の最後に着火できたことを喜ぶ姿が印象的でした。
＜スタッフふりかえり＞
・午前、午後と参加した参加者１人が火をつけることができた。
火をつけることができなくても、煙が出ただけでも参加者の達成感はある。
うまく火がつくように材料の下準備（購入も含めて）が必要である。

【ミニオリエンテーリング】ＡＭ：2人、ＰＭ：3人
施設周辺に設置した18か所のポストを探す活動です。ポストを見つけるごとに、全員で地図を見合い、相談して次のポストを見つけていました。活動を続けていくうちに親睦がさらに深まり、道を間違えてもフォローしあえるようになりました。
午前も、午後も時間一杯まで活動し、すべてのポストを見つけることができました。
＜スタッフふりかえり＞
・70分で全ポストを回るのは時間が足りないが、活動範囲（運動量）は適当だと思う。
数人で回る際には話し合いも必要で、相談しながら仲良く回っていた。



【葉っぱのスタンプ】ＡＭ：1人、ＰＭ：2人

施設周辺にある葉っぱを集め、絵の具を塗り、コットンバッグにスタンプする活動です。本所で実施した事業の中で好評を博し、来年度から利用者へ提供する活動を先取りで実施しました。葉っぱに色とりどりの絵の具を塗り、個性豊かな作品を作り上げていました。

＜スタッフふりかえり＞

・個人での作品作りになるが、保護者と一緒に作品を作りながら話す姿も見られた。

【室内スポーツ】ＡＭ：6人、ＰＭ：8人

日頃運動する機会の少ない子供たちは、少年センター主催の事業で本所を利用する際も、プレイホールで行うスポーツを楽しみにしています。今回も午前中はバスケットボール、午後はバドミントンと、何をするかを自分たちで話し合って、楽しく活動することができました。

＜スタッフふりかえり＞

・午前はバラバラに活動していたが、午後は少年センター職員からの声かけもあり、男女で一緒にバドミントンを楽しむ姿も見られた。1人で楽しめるもの（フラフープ）や少人数で楽しめるニュースポーツがあっても良いのではないか。

○課題を抱える青少年を支援する体験活動事業として、配慮して実施したこと。

・事業広報（チラシ）について、活動内容よりも参加時の不安を解消する内容を多く掲載し、保護者が子供を事業に誘いやすいようにした。
・体調不良が起こってしまうことを考慮し、途中参加、途中帰宅を可とすることで不安の軽減を図った。
・事業対象者の特性上、直前にキャンセルの恐れがあることを考慮し、キャンセル料が発生しない活動プログラムを提案するようにした。
・チョイスできる活動内容は、屋外で自然を感じることができる活動、失敗を繰り返しながら達成感を得ることができる活動、子供達に人気がある活動という視点で５つの活動を設定し、参加者に自分で選択してもらうようにした。
・ 参加者の活動意欲が高まるよう、屋外で円になり、今日1日が「自然の遊園地」と宣言することから会を始め、全員で焚き火に点火して活動をスタートした。
・スタッフも参加者と一緒に楽しみながら、もう一歩先の楽しさ・頑張り・ヤッターにつながる声かけや関わりを大切にした。

Q:他の人と仲良くできるか心配だな～
A:自然の家では、グループの中で
1人1人に大切な役割があると考えています。
少しずつ仲良くなれたらいいね。

Q:途中で具合が悪くなったら
どうしよう。
A:自分のペースで参加して、大丈夫。
途中参加、途中帰宅してもいいよ。
（保護者の方は、自然の家までの送り迎えをお願いします。）

Q:いろんな活動があるけど、
上手に最後までできるか不安だな～
A:自然の中での活動は、たくさん失敗してOK！
正解は1つだけじゃないよ。
簡単な活動から、一緒に、やってみよう！

Q:参加したいけれど、1人では
自然の家まで行けません。
どうしたらいいの？
A:諫早駅と少年センターまで、
自然の家のバスが迎えに行きます。
申し込みの時に「バス送迎希望」と
書いてね。

Q:1人で参加するのは
さびしいな～
A:お友達や家族と一緒に来て、
活動してもOK！

＜事例：小学５年生男子児童＞

午前も午後も火おこし体験を選択し、保護者と役割を交代しながら摩擦棒を回した。徐々に上手に回せるようになり、最後には火をつけることができ、喜びの表情を見せていた。
アンケート記入の際、保護者とスタッフの「今日一番うれしかったのは、火がついた時かな？」という声かけに対して「煙が出て、においがした時がうれしかった」と答え、炎が出た瞬間だけではなく、1日の活動全体をふりかえることができていた。
保護者のアンケートには、「いつもなら、できない事に腹を立てたり、あきらめたりしてしまう場面でも怒り出さずに最後まで活動しようとしていて、成長を感じられた」と記載があった。

＜事例：中学２年生女子生徒＞

アンケートには、「自分は普段、優柔不断なところがあるが、他の人から意見を求められたり、相手の意見を聞いたりして、自分で考えて行動することが多くて楽しかった」と対人関係についてのふりかえりがあり、事業全体についても「いつもは班の中で成功を目指す活動が多かったが、自分で活動を決めて楽しく過ごすことができて楽しかった」との感想があった。

＜事例３：中学３年生男子生徒＞

5つの活動の中で「室内スポーツ」を選択する参加者が多い中、中学3年生の男子生徒は活動開始直前に「いつでもできる活動だから」とミニオリエンテーリングに活動を変更した。周囲に流されず、自分の意志で活動を選択する貴重な経験となった。

＜参加者アンケートより＞

・いつもは班の中で成功を目指す活動が多くありましたが、今日は自分で活動を決めて楽しく過ごすことができて楽しかった。
・自分は普段、優柔不断なところがありますが、他の人から意見を求められたり、相手の意見を聞いたり、自分で考えることが多くて楽しかった。
・人の役に立てていることが嬉しく、失敗しても笑いながら楽しく過ごせました。

＜保護者アンケートより＞

・いつもならできない事に腹を立てたり、あきらめたりしてしまう場面でも怒り出さずに最後まで活動しようとしていて、成長を感じることができました。
・仲間と楽しそうにスポーツする様子を見守ることができ、葉っぱのスタンプも親子で取り組めて良かったです。また、参加させたいと思います。

＜諫早市少年センター　紙永所長より＞

・今回のように活動を個人で決定する機会は、人数が多い学校の宿泊学習では難しいため貴重でした。自然の家での活動は、他者と関わりやすい状況になりやすいため、不登校の生徒に限らず、コミュニケーション能力を高める効果があると再認識しました。また、参加者も日常では出会わない（個別の状況を深く知らない）施設スタッフとの活動や交流を楽しんでいる様子が見られました。

＜長崎大学　小原先生より＞

・自分の殻に閉じこもりがちな傾向にある子ども達が、活動を主体的に選択し、仲間と共に協力しながら、心を外向きにできていました。大人のスタッフとも気兼ねせずにフラットな関係で話していました。「チョイス」は、今回のような課題を抱える子どもにとって有効な事業であると感じられました。

＜課　題＞

①新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、3月の平日１日のみの実施となった。

②各学年のまとめの時期で参加を呼びかけにくい状況となった。今後は学校の行事予定等に配慮した実施時期の検討が必要である。

③適応指導教室の通級生のうち本事業の事業対象者（効果が期待できる生徒）に該当するのは、一部の生徒に限られるとの助言をいただいた。今後は広報先の再検討が必要である。

④今後も、今年度と同様に活動選択の機会を設定していく予定であるが、繁忙期はスタッフの調整が困難であるため、事業の実施時期等を検討していく必要がある。

⑤参加者に近い年齢層のスタッフの必要性が感じられるため、今後は大学生などより多くの若い法人ボランティアが事業運営に係わるような体制を整えていく必要がある。

４．令和４年度～７年度の実践研究事業の方向性

令和４年度からは、「チョイス」の実践を引き継ぎつつ、施設の特色あるプログラム開発として位置づけている「防災・減災教育」を実践研究のテーマとし、以下の方向性の下に取組んでいく予定である。

（１）研究のテーマ

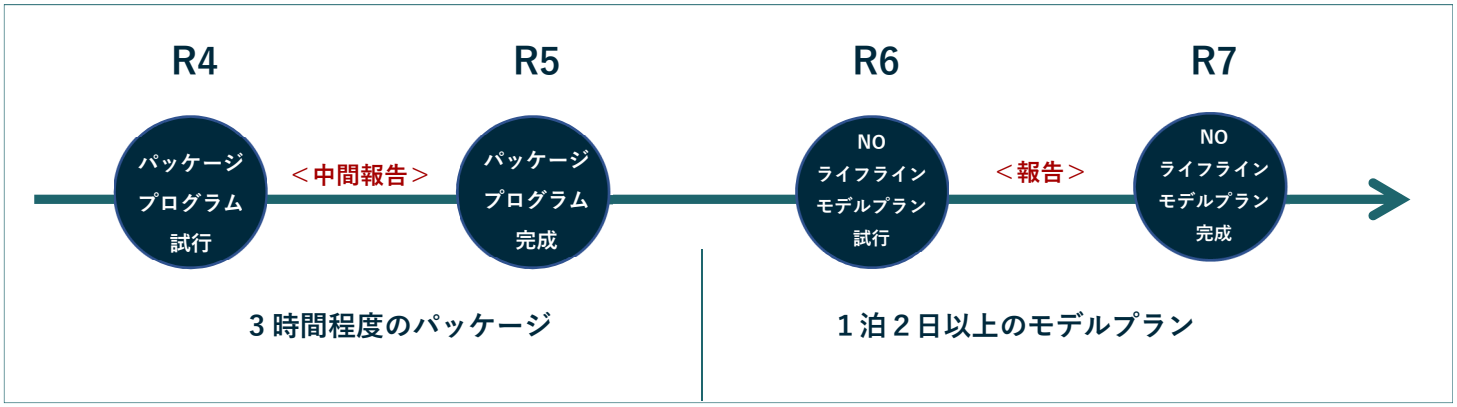
防災・減災を学ぶ意欲を育み、主体的に判断し、安全に行動することができる防災・減災教育プログラムの開発

（２）研究の目的

全国都道府県教育長協議会第２部会「青少年の体験活動の推進について～都道府県立青少年教育施設における体験活動の充実に向けて～」において、65.9％の都道府県における青少年教区施設が防災をテーマとしたプログラムを実施していると回答しているものの、多くの場合、そのプログラムの効果検証が適切に行われているとは言い難い。

そこで、本研究では、①子供たちの防災・減災を学ぼうとする意欲を高める防災・減災パッケージプログラムの開発、②主体的に判断し、安全に行動できる力を身に付けることができる防災・減災教育モデルプランを開発することを目的とする。

（３）スケジュール



（４）詳　細

【Ｒ４】

内　容：パッケージプログラム案を検討し、その一部を試行する。

研究方法：教育事業において、検討したパッケージプログラム案を試行し、参加者の取組の様子等を踏まえて改善を図る。

【Ｒ５】

内　容：教育事業において、改善したパッケージプログラムを実施し、最終調整を図るとともに、研修支援団体へ提供できるよう資料を整える。

研究方法：同プログラムを実施した団体や教育事業参加者へ、実施前後において防災・減災を学

ぼうとする意欲に関する質問紙調査を行い、その効果を検証する。また、パッケージプログラム実施後の参加者の具体的な取組や行動を把握し、質問紙調査との相関を見る。

【 R6 】

内　容：当所キャンプ村を利用し、災害時に起こり得る電気、水道、ガスが止まった状況で、周囲と力を合わせて快適に近い生活を送るためにできることを考える「NO ライフラインモデルプラン」を試行する。また、そのような状況の中で自分自身又は集団で自主的に判断、意思決定し、災害時に適切な行動をとることができるかについて検証し、プログラムの改善を図る。

研究方法：主体的に判断し、行動できる力を身に付けることができる防災・減災教育モデルプランとなるよう、事業参加前後における質問紙調査を行う。

【 R7 】

内　容：令和６年度に実施した「NO ライフラインモデルプラン」をブラッシュアップした教育事業を実施するとともに、その成果を踏まえ研修支援団体へ提供できるよう資料等を作成し、提供できる体制を整える。

研究方法：前年度と同様の調査を実施し、サンプル数を増やしその効果を再検証するとともに、令和６年度のプログラムとの比較を行う。

自然の家 ＨＲＴ（ハイパーレスキューチーム）スタートアップキャンプ

－　災害時に仲間を助ける力を身につけよう　－

１．背景・目的

当自然の家が立地する長崎県では、全国的に有名な雲仙普賢岳の噴火のほか、さらに過去をさかのぼれば、諫早大水害、長崎大水害等の水害など、災害による大きな被害が発生しています。また、近年の日本を見れば、阪神淡路大震災や東日本大震災、熊本地震等、大きな被害を伴う災害が数年から十数年おきに多数発生しています。特に熊本地震は、３０年以内に地震が発生する確率が０％から 0.9％といわれていた断層によって引き起こされており、全国各地でいつ災害が発生してもおかしくない状況にあります。

当自然の家は、多良山系の中腹に位置し、自然豊かな環境に立地しています。当自然の家の活動場所であるキャンプ村は、周囲を森に囲まれた場所にあり、災害時に起こり得るライフラインが遮断された状況を再現することが可能です。また、当自然の家がこれまで行ってきている仲間づくりを中心としたコミュニケーションプログラムのノウハウは、災害時に子供たちが前を向いて生き抜いていく力を身に付ける一つの手段になると考えています。

そこで、小学校４年生から６年生の児童を対象に、防災・減災教育をテーマとした教育事業を実施し、その効果を検証し、当自然の家を利用する団体へ提供できる防災・減災教育プログラムを開発することとしました。

２．目指す子供像

○ 災害発生時の状況を理解し、日ごろの備えの大切さに気付く。

○ 被災時に想定される火事、怪我等への対処を学び、共助の精神を養う。

○ コミュニケーションを図りながらチームで課題に取組むことで、課題を解決するための力を身に付ける。

３．工夫したポイント

○ 参加者のモチベーションを高めることを狙い、災害時に救助活動を行うレスキューチームに所属したという設定とした。

○ 災害時に想定される困難な状況を、工夫してチームで解決する活動を通して、災害に対する日々の備えを見直すとともに、主体的に物事を判断し行動する力や互いに協力して生き抜こうとする態度を養うことを期待した。

○ 防災・減災について、自主的に学び考え続ける青少年を育成するため、楽しさを重視した活動内容とし、ふりかえりではレスキューチームの一員としてこれから頑張ることを宣言した。

4． 参加者

計 16 名

男	6
女	10

4 年生	8
5 年生	5
6 年生	3

5． 日程・内容

台風接近による短縮した実施内容

	10:00 10:30		12:00 12:30 13:00			15:00		16:00 16:30		
9/17（土）		受付	開会式	レスキューチームレベルチェック（課題解決ゲーム） 防災のお話	昼食	キャンプ村へ移動	防災ミッション①（消火訓練、応急手当等）	防災ミッション②（火つけ体験）	キャンプ村から移動	閉会式	解散 送迎バス出発

日程短縮前の、予定していたプログラム

	10:00 10:30			11:30 12:15		13:00		15:30		19:30	20:30	21:30
9/17（土）		受付	開講式	レスキューチームレベルチェック	昼食	キャンプ村へ移動	防災ミッション① ※テント設営含	防災ミッション② ※夕食づくり	防災ミッション③	就寝準備	就寝	

	6:30		9:00			12:00 13:00		14:00	14:30	
9/18（日）		朝食 テント撤収	防災ミッション④	キャンプ村から移動	昼食	ふりかえり	閉講式	解散		

６． 活動詳細

（１）レスキューチームレベルチェック

開会式では、当所所長がハイパーレスキューチーム（以下、ＨＲＴ）隊長、その他のスタッフはＨＲＴ先輩隊員としてあいさつし、ＨＲＴが発足したという雰囲気づくりを行いました。

その後、トランプを使用したゲームを行い、頭で考えて答えを出したり、他の参加者と協力したりする活動を行いました。初めて会ったメンバーも、少しずつ笑顔が見られるようになりました。

（２）講義（防災のお話）

ＮＰＯ法人街づくり・防災諫早の川浪氏より、実際に被災地支援を行った際の写真を見ながら、災害発生時の被害状況やその対応などを学びました。質疑応答の時間では、「車に乗っている時に地震にあったらどうすればいいですか。」など、積極的に質問をしていました。災害の種類によって、被害の状況が全く異なることなどを理解しました。

（３）防災ミッション①（火災発生時の対応）

諫早消防署、諫早市消防団の協力により、水消火器、消防車からホースをつなげ放水する体験を行いました。「消防車に水が積んであると思っていた。」という感想があり、初めての体験で知ることもあったようです。消防服を着用しホースを握る子供たちの表情からは、気持ちが高ぶっている様子が伝わってきました。

（４）防災ミッション②（ケガ人等への対応）

諫早消防署の方の実演により、胸骨圧迫やＡＥＤの使用方法を学びました。また、ケガにより出血している人がいた時の対処について学び、実際に処置をする練習をしました。血のりを用いて、実際に怪我をした臨場感を出し、どのように処置をしたり声をかけたりすればよいかを、子供たち自身が考えながら行動しました。

（５）防災ミッション③（火起こし体験）

避難所に避難してきた人たちに温かい食事を提供してあげようという設定の下、メタルマッチと麻ひもを使用し、班ごとに火をつける体験をしました。ガスを使用する時と異なり、なかなか火がつかないため、木の置き方を変えたり落ち葉を拾ってきたりして、工夫しながら取組んでいました。

（６）ふりかえり

今日学んだことや勉強になったこと、ＨＲＴの一員としてこれから頑張りたいこと考え、全員の前で発表しました。「自分の身は自分で守ろうと思いました。」、「具合が悪そうな人がいたら、声をかけることを頑張りたい。」等、自助・共助の気持ちが高まっている様子が見られ、ＨＲＴの一員として決意を新たにしました。

７． アンケート結果（事業全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
８７．５％	１２．５％	０％	０％

８． 参加者の声

○ もし人が倒れていたケガをしている人がいたら、勇気を出して声をかけてみようと思いました。今日やったことを生活に生かしていきたいです。

○ 学校の勉強よりいろいろ知ることができたと思う。

○ 人を助けることは難しいと思いました。

○ ライター以外に火をつける方法を知らなかったので、初めての火起こしで失敗したけど楽しかったです。

○ 仲間と協力してやることの大切さに気付いた。

９． 成果と課題

【 成果 】

○ 諫早市危機管理課と連携し事業内容を検討したことで、諫早消防署、諫早市消防団に協力をいただき、災害対応のプロフェッショナルから指導される体験を子供たちに提供することができた。

○ サイレンを鳴らした消防車が到着する、制服を着用した署員、団員の方に指導してもらえるなど、災害発生時の臨場感ある活動としたことで、子供たちの好奇心を高めることができ、

活動に意欲的に取組む姿が見られた。

○ ＨＲＴの一員であるという設定を、協力いただく講師の方と事前に共有していたことによって、職員や講師が共通理解の下に指導に当たることができ、子供たちもそのような設定を理解し、楽しんでいる様子であった。

○ 災害の様子が分かる写真を見せて説明したことで、子供たちの理解を深めることができた。

【 課題 】

○ 通常の利用団体へ防災・減災体験活動プログラムとして提供できるよう、今回実施した活動をパッケージ化していく。そのためには、一つ一つの活動を整理し、ストーリーのあるプログラムとなるよう修正していく必要がある。また、各講師の直接指導がなくても臨場感ある体験となるような工夫が必要である。

○ 今回のキャンプで防災・減災に関する知識や技術を身に付けただけで終わらずに、参加者が防災・減災について今後自主的に学び考え続けていくような手立てを考えたい。

１０． 関係者の声

（１）諫早市危機管理課　吉田課長補佐

災害は経験してから気づくと言われますが、誰もが経験したくありませんよね。今回のプログラムでは実際の防災活動、消火活動など体験していただくことができ、防災・減災に対して意識が高くなってくれたのではないかと思います。

対応した消防団からも、自分たちの活動を知ってもらえたこと、人に教えることが勉強になったとの感想をいただいていますので、今後もこのような活動を通じて、子供たちに消防防災の大切さを伝えていければと考えております。

（２）諫早消防署　東隊長

今回の防災キャンプは、小学校高学年を対象として災害時に想定される火災発生時の消火方法や負傷者に対する応急手当の方法を学んでいただきました。各ミッションは、全体で活動内容を説明した後に各チームで実践する形式で行いましたが、実践に際しては地元消防団の協力を得ることで、参加者全員に対応できたことが大変良かったと思います。

また、参加者一人ひとりが自分たちに何ができるか、何をしなければならないかを考え、そして失敗をおそれずチーム全員で協力して実践することで、防火・防災の意識を高めるとともに人命救助に必要な勇気と積極性を学んでもらえたと実感しています。

しかし、当日は台風接近に伴いプログラムを一部変更しての実施となったため、今後は開催時期を考慮する必要があるかもしれません。

最後に、この防災キャンプを通して、参加者の心に防災・減災に対する気持ちが芽生え、それを大切にして成長していってくれることを期待しています。

５．令和３、４年度の実践研究における評価（長崎大学名誉教授　小原達朗氏）

令和 3 年度の実践研究事業における「チョイス」は、不登校や引きこもり等の課題を抱える子供たちの一歩外へ踏み出す意欲を高めることを目的とした試みであった。高止まりしている不登校・引きこもり児童生徒がスポーツや日頃とは異なった体験を自ら選択して挑んでいる。子供たちは、積極的に時間を忘れて活動に取り組んでおり、本事業の効果が実感された。長崎県においても本事業に関心を示していただき、新たな取り組みが期待される。

令和 4 年度は、新たに「防災・減災教育」を実践研究テーマとして取り組まれた。自然災害や事故災害に対して、防災をテーマにした教育プログラムが近年多く取り組まれている中、子供たちを対象に「HRT スタートアップキャンプ」として防災・減災教育プログラムパッケージ開発のために試行的に実施されたものである。4 年生から 6 年生までの子供たちの防災や減災関する知識・技能の獲得状況が明らかにされ、取り組むべき課題や方向性が示されている。また、防災・減災に対する「学びの意欲づくり」から「主体的判断・行動」へ結びつける教育モデルプランも示され、今後の展開が期待される。

６．おわりに（国立諫早青少年自然の家所長　蓮見直子）

この２年における実践研究事業は、長崎大学の小原教授にアドバイスをいただきながら進めてきました。不登校や引きこもり等の課題を抱える子供たちが、一歩踏み出す意欲を高めるためのプログラムを試行した成果を踏まえ、防災・減災に対する「学びの意欲づくり」をテーマとして取り組みました。テーマや対象とする子供の特性は違いますが、目指す子供の姿は、知りたい、やってみたい、学びたいという意欲が高まっている状態になるということです。意欲を高めるためには、多様な体験の中で生じる楽しさや嬉しさ、苦しさの中での連帯感や達成感などの感情や気づきがとても重要です。

以下、国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター発行の「子どもの成長を支える２０の体験～子どものために私たち大人ができることは～」より引用します。
（https://www.niye.go.jp/about/kouhou/siryou.html）

『“体験する”ということは、何かしらの活動（自然体験、遊び、学習等）や行為（人助けをする、けんかする等）を“すること”だけを意味するのではなく、その活動や行為を通じて得られる感情（うれしい、感動、悲しい、悔しい等）や気づき（分かる、発見する等）、学び（理解する、できるようになる等）など、いわゆる体験の質に関わる部分も含まれています。また、“体験する”ということには、自らが動いたり働きかけたりする能動的な体験だけではなく、他者からの働きかけ（褒められる、叱られる等）など受動的な体験も含まれてきます。つまり、“体験する”ということは、何かしらの活動や行為を能動的又は受動的に行い、それを通じて得られる感情や気づき、学びを含んだ一連の流れを表しているといえます。そして、こうした体験を通じて得られる感情や気づき、学びこそが、子どもの成長を促す大きな糧になると考えられているのです。』

私たちは、プログラムには見えない「体験の質」を高めるためにどのような働きかけが大事なのかを考え、実践と検証し続けることこそが実践研究であることを肝に銘じつつ、引き続き挑戦していきたいと思います。

実践研究事業　中間報告書

令和４年３月　作成

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立諫早青少年自然の家　企画指導専門職
〒859-0307 長崎県諫早市白木峰町 1109-1
TEL：0957-25-9111
ＨＰ：https://isahaya.niye.go.jp/